

酸性雨は標高が高くなると 弱まる場合と強まる場合がある

図4-2は観測点の標高に対する降水のpHを示したもので、月平均で見ると全ての観測点で酸性雨が降っています。標高に対する変化では、平野で酸性雨が強く標高が高くなると酸性雨が弱まる傾向が見られる場合(2009年の例)と、逆に、標高が高くなると酸性雨が強まる場合(2008年の例)とが見られます。2009年の観測例では、標高が1500mあたりと2100mあたりでpHが上昇し、酸性雨が弱まっていますが、この標高付近を通過した黄砂が観測器の上に落ち、これが雨の試料に溶けてpHが高くなったものようです。この試料のイオン分析をすると、非海塩性カルシウムイオン濃度が通常よりも高くなっていました(立山の大気環境から考える6、および、立山の雨と霧(雲)から中緯度地域上空の大気環境を考える3参照)

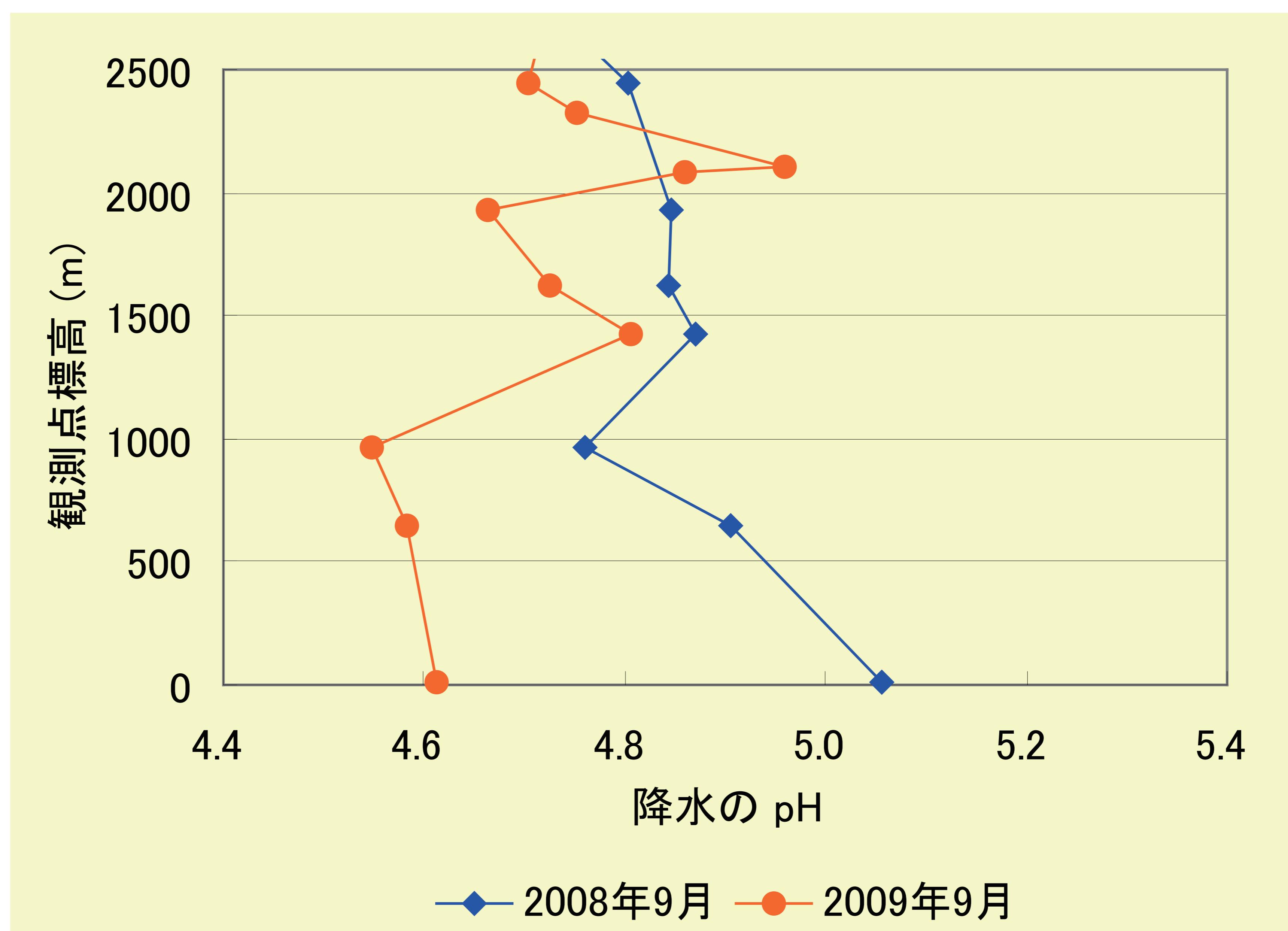


図 4-2 観測点標高に対する降水のpHの値(pH5.6以下は酸性雨)

参考文献

朴木英治、渡辺幸一、立山における酸性雨観測2008、富山市科学博物館研究報告、33, 113-120, 2010
富山市科学博物館研究資料